

アジア・ナショナルリズムの現段階的諸相

——その基本的理解のために——

板垣與一

一 アジア・ナショナルリズムの基本的性格

戦後のアジアの政治情勢を規定するものは、一般にナショナルリズムといわれている。しかもこれは単に現段階におけるアジアの情勢を左右するダイナミックな力であるばかりでなく、アジアの政治的未來そのものをも決定する基本的な動因である。アジアのナショナルリズムの基本的性格と動向を理解することなくしてアジアを語ることはできない。

第二次大戦後のアジアの政治情勢は一大變化を遂げた。アジアを激變せしめたものは、いうまでもなく既存

アジア・ナショナルリズムの現段階的諸相

の西歐的植民地制度を破砕したナショナルリズムの革命的な力であった。アジアの地圖は塗り變えられて、新しい獨立國家が次々に生れた。もちろん、いまなお政治的獨立を達成し得ずして、死活の鬭争をつづけている若干の地域が残されている、しかし大勢は既に決したといつてよい。そのかぎりにおいて、もはや歴史の潮流を逆にする何ものも存在しない。

このような意味で、戦後のアジアはたしかに大きな變化を遂げた。ナショナルリズムが反抗の概念であり、抵抗の概念であるという意味においては、アジアのナショナルリズムは近代の西歐的ナショナルリズムとその性格をひ

とつにしている。さらにアジアのナシヨナリズムは、西歐のナシヨナリズムがその課題としたように、デモクラシーやインダストリアリズム Industrialism への結びつきをその必然の課題としなければならぬであろう。この意味でもアジアのナシヨナリズムは西歐のナシヨナリズムと無縁のものではない。

しかしながらアジアのナシヨナリズムは單なる西歐的先進國のナシヨナリズムにすぎないであろうか。世界史の展開過程における時間的前後の區別にすぎないナシヨナリズムとして理解しうるであろうか。そうではない。アジアのナシヨナリズムの様相はもっと複雑且つ多面的であつて、西歐的概念における單純化も類型化も許されないものである。

第一に、アジアのナシヨナリズムの基本的性格を規定するものは、植民地ナシヨナリズム Colonial Nationalism であるということである。アジアの殆どすべての諸地域、諸民族が、西歐ナシヨナリズムの政策の手段として、過去三世紀にわたる長いあいだ植民地、半植民地、保護國ないし屬領として支配せられてきたという基本的

事實こそ、廿世紀のアジアのナシヨナリズムの性格とその課題を複雑ならしめたのである。戦後のアジアのナシヨナリズムに絡みあつた一切の政治的不安も經濟的窮乏も宗教的社會的分裂も、すべてこの基本的事實の反映にほかならない。

第二に、アジアのナシヨナリズムは、いうまでもなく、内部的發展の可能性の問題として把握されねばならない。而して、アジアのナシヨナリズムの未來を決定するものは、この可能性の政治的、經濟的、文化的側面が異なる方向と態様において發現せられるかに依存している。しかしながら、このアジアに固有なる内部的要因の成長可能性の問題も、一方、舊宗主國の植民主義の殘存や、他方、一般國際政治情勢の變轉など外部的諸要因の壓力によつていちじるしく左右せられる性格を有するがゆえに、單純な直線コースを辿り得ない原因を内蔵している。曾て西歐が世界そのものであつたように、アジアは世界それ自體ではなく、あくまでも世界の一環として、しかもしばしば自主的主體的ならざる一環として、國際關係の變化と反應から獨立であり得ないかぎり、いわゆ

る國際關係におけるナシヨナリズムたる性格を強く帯びている一事を明確に認識しなければならぬ。アジアのナシヨナリズムが植民地ナシヨナリズムとしての性格をもつということと、國際關係におけるナシヨナリズムとしての運命を擔うということをしつかり把握することは、アジアのナシヨナリズムの基本的理解にとって最も肝要なことである。

二 残存植民主義の問題

——獨立と統一を阻むもの——

ところで、アジアのナシヨナリズムは植民地ナシヨナリズムとして、何よりもまず民族國家の主權的獨立と國際社會における平等の一員としての固有の權利を主張する。戦後マレーを除いて殆んどすべてのアジア地域諸國が、踵を接して政治的獨立をなしたことは歴史の壯觀であつた。政治的獨立という點に關するかぎり、アジアのナシヨナリズムは偉大な成果をおさめたといつてよい。もちろんその獨立の形式は、インド、パキスタン、セイロンにしても、インドネシアやヴェトナムにしても、

アジア・ナシヨナリズムの現段階的諸相

いわゆるコンモンウェルス Commonwealth 方式に準據したものであり、また完全獨立國たるフィリピンやビルマにしても、多かれ少かれ舊宗主國との政治的軍事的連繫から完全に自由なものとはいえない。いわんやいまだ政治的統一過程にあるヴェトナムや獨立闘争過程にあるマレーにあつては、政治的未決問題は單純な性質のものではない。アジアは非常な變化を遂げたけれども西歐のコロニアリズム Colonialism はいまだにその殘滓を清算し切れず、最後の残り物をも失うまいとする見苦しい努力がいたるところに展開されている。

インドシナ戦争を長期化し、ヴェトナムにおける今日の混迷を導いたものは、ゴムと米の豊庫たるコーチシナをヴェトナムから切り離して掌中におさめんとした思い切りの悪いフランス植民主義そのものにほかならなかつた。ジャワ、スマトラ、ボルネオ、セレベスを放棄したオランダ植民主義が、最後の據點を西ニューギニアに求めんとするあがきこそ、ほかならぬ西イリアン Irian 問題として、インドネシアをして「オランダ・インドネシア連合」Netherlands-Indonesian Union を解消せしめ

た（一九五四年八月十日）根本原因であり、またインドネシア・ナシヨナリズムの健全な發展を阻害する一大要因となつてゐることを見逃すことはできない。植民主義の清算に比較的迅速な行動をとつたイギリスでさえもシンガポールを直轄植民地としてマレーから切り離し、すでに命運のあきらかなゴアへのサチャグラハ行進に對して、ポルトガル植民主義は假借なき銃口を向けてゐる。

西歐コロニアリズムに對する植民地ナシヨナリズムの戦いは、單に主權の獨立に關する場面においてのみではない。獨立と同時に政治的國內統一に關しても存在してゐる。西歐コロニアリズムは過去において分割統治 (divide and rule) と間接統治 (indirect rule) との二つの原則を巧みに組み合せつつ植民地支配を間然なきものたらしめたが、戦後植民地に獨立を許與したものの、統一については甚だ姑息な手段に訴へた。獨立後各地に頻發した分離主義的反政府運動の背景には、舊宗主國の陰の力がはたらいていたのである。

たとえば、インドネシアの今日の苦惱は、中央集權的共和國政府に對する地方の反亂の頻發であるが、これも

その根因を探れば分離主義 (Separatism) を温存したオランダ植民主義の歸結である。すなわち、ハーグ獨立協定にもとづくインドネシア共和國の體制は「連邦主義」(Federalism) に基礎をおいたものであった。⁽³⁾ これはもとよりインドネシア民族指導者達の願望によるものではなく、強大な「單一國家」(Unitary State) の出現をおそれるオランダ植民主義者の人爲的工作によるものであった。

すなわちオランダ植民主義者は、主權讓渡のハーグ協定成立に至るまでの期間に、東インドネシア、パスタン、東ジャワ、マツラ、東スマトラ、南スマトラ等の六つの自治國 (Negara) および中部ジャワ、バンカ、ピリトン、リオー、西ボルネオ、ダヤク、バンジャル、東南ボルネオ、東ボルネオ等の九つの特別自治州 (Daerah Istimewa) を、オランダ支持のもとに創設し、これらとスカルノ (Sukarno) を首班とするインドネシア共和國に連合せしめて、いわゆるインドネシア連邦共和國 (Republik Indonesia Serikat) とらしめた。而してインドネシア連邦共和國の下院の構成を定員百五十人となし、そのうちインドネシア共和國の代表を五十人に限定し、その他の

六自治國、九特別自治州に百人の代表を割當て、いかなる立法も過半数を必要とすることとせられたのである。オランダの露骨な分割統治の方策はかくして失われゆくオランダ権力の最後の隠れ蓑となったのである。

しかしながら、四五年八月の獨立宣言當時の憲法第一條第一項に「インドネシア國家は單一國家である」と明瞭にうたった獨立運動の指導者達が、この見え透いたオランダの挑戦にいつまでも黙止する筈がなかった。主權讓渡の六週間後に強力に押し進められた統一國家運動はこのオランダの挑戦に對する眞向からの反撃であつた。

そしてこの反撃は見事に奏功し、獨立八カ月後の五〇年八月十五日には連邦制を廢して單一國家たることを宣言するに至つたのである。しかしながら、この統一國家の建設過程は決して言葉の如く安易に進行したものではなかつた。西ジャワにおけるウェスタリング大尉 Captain Paul Westerling の反亂、西ボルネオにおけるサルタン・ハミッド二世 Sultan Hamid II of West Borneo の陰謀、南セレンブス、マカッサルにおけるアンディ・アシム Andi Aziz 事件やその後のカハル・ムザカル Ka-

アジア・ナショナリズムの現段階的諸相

har Muzakar の反亂、南モルッカのスモキル博士 Dr. Soemkili を首班とする南モルッカ共和国 Republik Maluku Selatan の獨立宣言と舊蘭印軍兵士を中心とする反政府運動は、その組織的抵抗は五二年一月をもつて一應終熄したとはいふものの、高度の地方自治主義を主張する反政府分子の騷擾が、人種主義や宗教的要因とからみ合つて今日まで尾を曳いているのは、もとをたせばオランダ植民主義に一切の禍根がひそんでいたのである。

ビルマにおけるカレンニスタン Karenistan 運動すなわちカレン族を中心とする少數民族國家建設運動が、一九四八年以降のビルマ國內政治の重要な一問題となつたのも、戦前のイギリス分割統治政策の必然的な一所産である。また統一インドとしてではなく、分割インドとして分離獨立したことも、必ずしもイギリスの本志でなかつたとはいへ、過去の分割支配の避け難い報復といわねばならぬ。インドの分割はインドとパキスタンとの政治的對立と經濟的困難を激化し、またカシミールの主權歸屬問題をめぐつて宿命的な敵對關係に追いこまれること

となつたのである。

- (1) Jennings, Sir Ivor: *The Commonwealth in Asia*. Oxford 1951. 124 pp.
- (2) Lasker, Bruno: *Western New Guinea, Past and Future*. In: *Far Eastern Survey*, Apr. 16, 1952. pp. 53—59.
- (3) Schiller, A. Arthur: *The Formation of Federal Indonesia 1945—1949*. The Hague and Bandung 1955. 472 pp.; Finkelstein, L. C.: *The Indonesian Federal Problem*. In: *Pacific Affairs*, Sept. 1951. pp. 284—295; Jaquet, L. G. M.: *The Indonesian Federal Problem Reconsidered*. In *Pacific Affairs*, June 1952. pp. 170—175.
- (4) Kahin, George McT.: *Nationalism and Revolution in Indonesia*. N. Y. 1952. (Chap. XIV, *The Unitarian Movement*.) pp. 446—469.

三 宗教的ナシヨナリズムの問題

このようにして、アジアのナシヨナリズムは、西歐コロニアリズムの残滓と刻印のために、獨立の惱みと共に統一の惱みを深刻に味わっている。しかもアジアのナシヨナリズムの基礎をおびやかす要因は、單に外部から存

在するばかりでなく、かえって内部から存在しているのである。

政治的統一という點に關して、アジアの内部的現情勢はいかなるものであろうか、アジアに生れ出た新しい國家が、その獨立によつて、既存の秩序を破壊したといふことは、單に忌むしい過去の植民地支配の體制を破壊したばかりでなく、それと共に、イギリスの平和、オランダの平和、アメリカの平和、總じて西歐的平和をも破壊したことを意味した。西歐的平和とは一言にいへば「法による秩序」law and orderを意味した。そしてこの法秩序を支えたものは、善き意味にせよ悪しき意味にせよ、強大な権力であり權威であつた。しかるに新しく生れ出たアジアの獨立國家には、新しき秩序を支えるべき権力も權威も甚だ力弱きものである。ここから今日見るが如き無秩序と混亂への後退がはじまつたのである。

アジアのナシヨナリズムはここ五、六十年の若い歴史しかもたない。しかしその歴史は短いはいえ、また植民地ナシヨナリズムの特殊の性格を擔うとはいへ、ひとしく近代的ナシヨナリズムと呼ぶべき共通の特徴をそ

なえているといつてよい。元來、近代的ナショナリズムの發展は、宗教からの政治の解放をもってその基本的な特徴としている。近代的というのは國家と教會、政治と宗教との分離を指している。

ナショナリズムにとって最も重要な一事は、人々が抽象的な政治制度としての國家という存在に對して、他のいかなる集團又は制度にまして、最高の忠誠を誓うという一定の精神の状態である。この精神の状態は通常パトリオティズム *Patriotism* と呼ばれるものであるが、これがほかならぬナショナリズムの精神的基底をなすものである。西歐ナショナリズムにとっては、パトリオティズムは、歴史的に自生的に、社會環境の自然的所産として成長したものである。しかるに、アジアのナショナリズムにとっては、これは新しく形成さるべき精神的課題である。問題は人心を統轄し歸一せしめるところの權威の問題である。この權威が國民的統一の象徴となるのである。ヨーロッパの近代的ナショナリズムは、非宗教的、非人格的な國家に、最高の忠誠を誓うことをなら疑わなかった。しかしいまだ十分に近代化されていないアジア

アジア・ナショナリズムの現段階的諸相

ア民族社會にとって、抽象的な國家に對する忠誠の念は必ずしも自明的なものといふことができない、民族的統一ないし社會的統一の象徴としての權威は、むしろ宗教的なもの、傳統的なもの、カリスマ的なものに結びついたものとしてのみ實感せられ、これを抽象的な國家に認めるといふことには、きわめて大きな精神的ギャップが存在する。このギャップに、コミュニナリズム *Communism* に結びついた宗教的ナショナリズム *religious nationalism* や、人種、言語等に結びついた人種的ナショナリズム *racialism* や、言語ナショナリズム *linguistic nationalism or regionalism* が發生する十分な理由があるのである。

殊にアジアの宗教のうちでも回教 *Islam* は政治的性格の最も強烈な宗教であり、唯一神アルッラー *Allah* に對する歸依、忠誠の念は何物にも代え難きものなのである。それゆえ、アジアの回教徒が、回教國家 *Islamic State* の建設を熱望するのは決して理由のないことではない。パキスタンがヒンズー・インドから分離したのは、單なるコミュニナリズム（宗團主義）の立場からの

みではない。單に回教徒民族の獨立國家を建設するといふばかりでなく、最近（一九五三年十一月二日）制憲議會がパキスタンを回教共和國として宣言したように、建國の基本原則を回教教義に立脚する宗教國家として建設しようというのである。もちろんここに宗教國家といつても、リアカット・アリ・カーン Liaquat Ali Khan の見える如く、「パキスタンは回教の諸原則に従い且つ神に由來する權威にもとづいて統治されるが、それは通常理解される言葉の意味における神政國家 a theocratic state ではない。このような觀念は回教とは全く無縁のものである。ただ國家は中立的傍觀者の役割を演ずべきではなく、回教社會の建設にとって有利な諸條件を積極的に促進すべきもの」と理解せらるべきであろう。たしかにパキスタンは神政國家としてではなく世俗的近代國家 a secular modern state としての建設を意圖している。しかしそれにもかかわらず、パキスタンは制定さるべき新憲法において、國家元首は回教徒たるべきことや、新憲法にもとずきいかなる立法もコーラン Koran やスンナー Sunna の命ずるところと矛盾しないことを確保す

るために、國家元首に助言を與うべき「回教律法學者會議」 a Board of Mullahs の設置を基本原則として容認しているのである。憲法も一切の法律もコーランやスンナーにもとづく回教法 Shariat に合致すべしという主張をめぐって、回教近代派 Modernists と回教正統派 Or the dox mullahs との間に熾烈な論争と意見の相異はみられるが、いずれにしてもパキスタンが人口からみて世界最大の回教國家の實現を夢見ていることは疑えない。これは一面においては、他の回教諸國に對するパキスタンの指導的役割を認めしめんとする政治的野心の下心もないわけではないが、イスラムの本義からすれば當然の歸結といわなくてはならない。

しかしパキスタンのこのような宗教的ナショナルリズムの推進は、隣國インドにとってはヒンズー教徒の宗團主義を一層刺戟することとなり、非宗教的近代國家を建設せんとするネールの立場にも不利な影響を與えるのである。インド國民會議派は近代的政黨として、非宗教的立場を堅持し、ヒンズー教徒にも回教徒にもまた人種、言語、宗教の差別を超えて、平等に解放せられたる近代國

家への道を理想としている。しかし他方、これにあきたらぬヒンズー・マンサバ Hindu Mahasabha 黨の如きヒンズー教的國粹主義者の一團の存在も無視するわけにはゆかない。聖雄ガンジーをその手に葬ったのは、ヒンズー・マンサバ黨の下部組織たる R・S・S Rashtriya Swayamsevak Sangh であつたことはわれわれの記憶に新しいところである。インドとパキスタンとの政治的緊張の痛となつてゐるカシミール問題は、インド國內の宗國主義的政黨を鼓舞する原動力となつており、パキスタンの回教共和國宣言はカシミール問題を自國に有利に展開せんとする伏線的示威にほかならぬことを、ヒンズー教徒ははやくも見てとつてゐる。

パキスタンの宗教的ナショナリズムの宣明は、とりわけ同じ回教徒民族社會を構成するインドネシア國家に對して深刻な影響を與えてゐる。インドネシアにおいては既に一九四八年五月より回教導師カルトスヴィルヨの M. Kartosuwirjo を指導者とするインドネシア回教國家 Negara Islam Indonesia 建設運動がダレル・イスラム Darul Islam (回教國家) の名のもとに西部ジャワを中

アジア・ナショナリズムの現段階的諸相

心として根強い反政府運動として發展してゐる⁽²⁾。假政府を樹立し、假憲法を發布し、パディ PADI, Panlawan Darul Islam と稱する軍隊を組織して、その勢力は一時あなどり難いものであつた。殊に五三年九月二十日北部スマトラのアチエ州が、全アチエ・ウラマ連盟 PUSA の會長、トンクー・ダウド・ブルエー Tungku Daud Bureh を指導者として反亂を起し、ダレル・イスラムの一環として獨立を宣言したことは、ジャワのダレル・イスラム運動を活氣づけることとなり、スカルノ政府は鼎の輕重を問われる事態におち入つたのである。

スカルノ大統領を中心とするインドネシア共和國の指導者達は、非宗教的な近代國家の建設をめざし、建國の基礎を四五年六月一日に宣明された五大原則 Pancha-Sila Pancha Sita におき、したがつて、ダレル・イスラム運動に對しては斷固たる態度をもつて鎮壓にとめてゐる。しかしながら、スカルノが右のパンチャ・シラにおいて、民族主義、國際主義、民主主義、社會正義のほかに、「神への信仰」 Belief in God という一原則を附加することを忘れなかつたのは、彼がインドネシア・ナ

シヨナリズムにおける宗教的要因の重要性を無視しえなかつた消息を示唆している。なぜなら、スカルノがここで神への信仰と名づけた真意は、必ずしも唯一神たるアルッラーを指したものと見做されないが、住民の九〇%が回教徒であるインドネシアの現實において、神への信仰とはすなわちアルッラーに對する信仰を指すものと受けとられることはきわめて自然だからである。しかしながら、このことは決して彼がダール・イスラムの如き回教國家への道を容認していることを意味しなむ。むしろスカルノはあくまでも世俗國家の確立を意圖し、すべての人に對する宗教的自由を認めんとするのである。

インドネシアの回教諸政黨ならびに諸機關 (イシキニ
黨 Masjumi、ナンダトタルル・ウラマヤ Nahdatul Ulama、サリカマイト・イスラム Partai Sarekat Islam Indonesia、ブルトヤ黨 Partai Islam Periti; Pergarakan Tarbiyah Islamiah、モンイブヤヤー Muhammadiyah 等) に加入してゐる回教徒は、概してカルトニスツイルヨのダール・イスラムに利用されないうだけの確固たる信念をもっており、ダール・イスラムの兇惡なテロ、

掠奪行爲にむしろ反感を抱いてゐるので、現在以上の急激な回教革命への發展はないとみてよい。しかしインドネシアの近代的統一國家の建設にとつて、ダール・イスラムの運動は、分離主義者の反亂や、共產主義者の煽動^(c)よりも、かえつて扱ひ難い障害となつてゐる。

- (1) Bailey, S. D.: Parliamentary Government in Southern Asia. London 1953. p. 45.
- (2) Curran, J. A.: Militant Hinduism in Indian Politics: A Study of the R. S. S. (Mimeo) N. Y. 1951. 100 pp.
- (3) Nieuwenhijze, C. A. O. van: The Dar Ul-Islam Movement in Western Java. In: Pacific Affairs, June 1950. pp. 169—183.
- (4) Dr. Sukarno: Pantja-Sila: The Basic Philosophy of the Indonesian State. In: Indonesian Review, Vol. I, No. 1, Jan. 1951. pp. 11—17.
- (5) この節は、これなごがウキムンナヤに於けるカホ・ダイ教 (Cao-Dai) やホン・ンテ教 (Hoa-Hao) の民族主義的性質や役割について、フクノーンの次の論文を参照せよ。Pall, Bernard B.: The Political-Religious Sects of Viet-Nam. In: Pacific Affairs, Sept. 1955. pp. 235—253.

四 言語ナシヨナリズムの問題

近代國家と宗教國家との調整に悩むアジアのナシヨナリズムに、さらにインドやパキスタンでは最近言語ナシヨナリズム Linguistic Nationalism の問題が重大化している。言語の國民的統一の問題は、近代國家の完成にとって最も重要な課題の一つであることはいうまでもない。フランス革命當時ジャコバン・ナシヨナリスト [Jacobin nationalists] が共和國理念や革命原理の國民的普及の手段として、リンガ・フランカ lingua franca としてのフランス語の統一とその國民教育のために異常なる熱意を示したことは決して偶然ではない。戦前におけるアジアの民族運動が、土著言語の統一化と、公用語化運動として展開されたのも、文化的抵抗としての一側面を示すものであった。ジャワ・スマトラにおけるインドネシア語の公用語化運動は民族の政治的自覺と連帶意識の文化的手段として推進された。⁽¹⁾ インドネシア共和國の現副大統領ハッタ博士 Dr. Mohammed Hatta が戦前インドネシア語を用いて「ギリシア哲學史入門」を書いて

アジア・ナシヨナリズムの現段階的諸相

たのも、インドネシア語が學術用語としても使用に耐えうるゆえんを明かにせんがためであった。またフィリピンにおけるタガログ語、ビルマにおけるビルマ語、インドにおけるヒンドスターニ語がそれぞれ公用語化または統一化運動として推進され、タイ國においてタイ語普及運動が極端なまでに奨励されたのも、いずれも民族土著言語の自己主張による民族主義運動として觀察することができる。

戦後においてはアジアにおける言語ナシヨナリズムの問題は、戦前とは若干様相を異にし、言語ナシヨナリズムと言語リージョナリズム Linguistic Regionalism との複雑な交錯という形であらわれている。まずインドはパキスタンと分離後、連邦公用語をヒンディ Hindi 語と定めたが、(行政や教育の手段として重要な英語は憲法施行後十五年間、すなわち一九六五年まで公用語として認められている)、一九五一年のセンサスによれば、ヒンディを理解しうる住民は一億八百万人であって、全人口の三分の一以下にすぎず、したがって憲法においても他の主要なる十三の言語を地方用語として公式に認めて

いるほどである。しかるに最近にいたってテルグ Telugu 語を使用する南インド・マドラス州の一部にアンドラ Andhra 州と名づける新しい行政地區が創設されるという事件が起つた(一九五三年十月一日)。これは普通の地方語使用地域を行政管轄単位とせよと云ういわゆる「言語州運動」 Linguistic Provinces Movement がついに效を奏したものである。

元來、テルグ語は南インドにおいて現在三千三百万の住民の間に通用する有力なる地方語の一つであり、戦前から言語上の自治 linguistic autonomy を要求する運動の最も盛んな地域であつた。この運動は早くも一九一三年五月に創立されたアンドラ・マハサバ Andhra Mahasabha に始まり、一七年にはインド國民會議派をして separate Congress Provinces として承認せしめ、結局、會議派は獨立にいたるまで數回にわたり反英運動の手段としても言語州の原則を擁護する立場を表明してきたのである。特に戦後の一九四六年十二月の制憲議會における獨立インド憲法案作成の時期をねらつて言語州運動は再び強力に推進されるに至つた。この問題を討究

する言語州委員會 Linguistic Provinces Commission

が設置され、ダル委員會報告書 Dar Commission Report (一九四八年十二月十日) や、ネール・パテル・シタライヤ Jawaharlal Nehru, Vallabhbhai Patel, Patandhi Sitaramayya 委員會報告 JVP Report (一九四九年四月一日) が相次いで發表された。ダル報告もネール報告(JVP)も原則としては言語州を認めたのであるが、その實施に關しては殊にネール報告にあってはきわめて消極的な態度が表明されたことはいうまでもない。しかしネール報告に對する猛烈な反對は、五一年八月十六日に始まるスワミ・シタラム Swami Sitaram や五二年十二月十五日に始まるポッティ・スリラムル Potti Sritamulu の斷食となり、さらに暴動となり、ついにネール政府もやむなく同年十二月十九日にアンドラなる新州の創設を決意し、五三年の夏の下院でアンドラ州法案 Andhra State Bill が附議せられ、十月一日にインドにおける最初の言語州が生れることとなつたのである。インドにおける言語州の問題はアンドラに限らず、南インドでも北インドでも數地域が日程にのぼつており、政

府も「州再編委員會」States Reorganization Commission を設置し(五三年十二月二十九日)、五五年六月三十日まで、その最終報告書の提出を命じているから、やがてその全貌がうかがわれる。

政黨も、コンGRES はもとより共產黨も人民社會黨 Praja Socialist Party も、言語州の問題についてはこれを支持する立場をとっておるので、インドにおける言語州の創設運動は次の總選舉の前後においてさらに活潑化するものと思われる。しかしながらこのように地方語を中心とする分權化運動の激化は、インド政府のヒンディ語統一化運動に對する重大なる障害となり、ひいてはインドの中央集權的統一國家への道を阻む一要因として、その影響を輕々に無視することはできない。この意味において現在のインドは國民統一上きわめて重大な試練の前に立っているといわねばならない。

さらに分割インドの悲劇的要素を一層深刻化せしめていることは、インドもパキスタンも、戦前ガンジーによって強力に提唱せられたヒンディ語とウルドゥ語(Urdu)との統一標準化によるヒンドスターニ國語化運動が完全

アジア・ナシヨナリズムの現段階的諸相

に放擲せられたことである。分割獨立後、インドはヒンディしかもデヴァナガリ文字によるヒンディ Hindi in Devanagari script を國語と定めて、サンスクリット系の語彙をますます増加し、パキスタンはウルドゥを國語に定めて、アラビック、ペルシア語彙を強化し、言語の上でもインドとパキスタンは共通性を排除しつつあるのである。しかもパキスタンにおいては、そのウルドゥに對してベンガリ語の言語リージョナリズムの運動が激化していることは、パキスタンの言語による國民統一の方向に暗い影を投じている。⁽³⁾

パキスタンの國語はウルドゥ語たるべしという決定はナジムディン Khwaja Nazimuddin 首相の時代になされたが、ウルドゥ語を理解するものは西パキスタンでは五〇%、東パキスタンでは一〇%以下の住民であり、しかも、西パキスタンの人口三千四百万に對して東パキスタンの人口は四千二百万である。したがって人口數からみてもベンガリ語 Bengali を理解する人々はウルドゥ語を理解する人々よりも多いのが現状であり、いかにウルドゥ語を、國語として強制することの困難であるかは

容易に理解しうるところである。それにもかかわらず西パキスタンの中央政府が公用語としてウルドゥ語を採用せんとしたことは、ベンガリ文化に對して大きな誇りをもつ東パキスタン住民の反感と抵抗を極度に刺戟したのである。かくして、熾烈な國語論争 State language controversy が展開され、この抵抗が制憲議會比例代表 proportional representation への要求と相結んで、一九五四年三月の東パキスタン地方選挙における與黨(回教連盟)の惨敗をもたらしたのである。東パキスタンの州自治 provincial autonomy への要求は、ほかに農地改革や財政問題にもからむ複雑な要因をふくんでゐるが、ベンガリ語を公用語とせよという言語リージョナリズムの運動は、無視することのできなない要因となつてゐるのである。右の三月選挙の結果はその後のパキスタン政治の方向を大きく變革することとなり、従来ややもすれば西パキスタン中心主義のきらいがあつたカラチ政府も、ついにウルドゥ語と共にベンガリ語を公用語として認める方針に轉換するに至つたのである。しかしながらこのような言語自治 linguistic autonomy への要求

は、パキスタンの國語統一の問題を不可能ならしめ、言語上の國民的統一への障害は、必然的にパキスタンの政治的統一を阻む大きな原因として作用してゐることは贅言を要せずして明かであらう。

(1) Alisjahbana, Takdir: The Indonesian Language — By-product of Nationalism. In: Pacific Affairs, Dec. 1949. pp. 388—392.

(2) Windmiller, Marshall: Linguistic Regionalism in India. In: Pacific Affairs, Dec. 1954. pp. 291—318.

(3) Maron, Stanley: The Problem of East Pakistan. In: Pacific Affairs, June 1955. pp. 132—144; Innes, F. M.: The Political Outlook in Pakistan. In: Pacific Affairs Dec. 1953. pp. 303—317.

五 議會制民主主義の問題

西歐のナショナルリズムが絶對主義における集權的統一と、デモクラシーにおける民主的自由との二つの段階を経て發展したように、アジアにおけるナショナルリズムも名實共に近代國民國家たらんとするならば、獨立と統一のフレーム・ワークのなかでの「民主的自由」democra-

to freedom を最高度に實現しなければならぬであらう。既に述べた如く、現段階におけるアジア諸國にとつて、政治的獨立と共に政治的統一を實現することがいかに困難な課題であるかを知つたのである。しかも困難はこれにとどまらないのであつて、同時に民主的自由の制度を確立しなければならぬのである。獨立と統一と自由といふこのいわば三重の課題は、いやしくもその名に値する近代國民國家として成長するためには、いかにしても避けることのできない基本的な課題なのである。

民主的自由の制度は、何よりもまずいわゆる議會制民主主義 parliamentary democracy ; representative government の確立の問題としてとりあげられるであらう。⁽¹⁾ 憲法、政府、議會、政黨、選舉等の西歐的制度と觀念は輸入されたが、はたしてアジアの傳統的政治組織、宗教文化意識、社會經濟構造とよく適合しうるであらうか。西歐的議會制民主主義はヨーロッパの同質的社會において典型的な發達を遂げたが、はたしてアジアの異質的、分裂的社會において機能しうるであらうか。人種、言語、宗教、カースト、複合社會等を要因とするコミ

アジア・ナショナルリズムの現段階的諸相

ニナリズム(宗團主義)、プロヴィンシャルイズム(地方主義)、レーシアルイズム(人種主義)、少數民族問題 minority problems など、低い生活水準(貧困)と低い知識水準(文盲)とからみ合つて、デモクラシーの發達を妨げる諸要因は山積している。もちろん、政治における近代化は必ずしもつねに西歐化 westernization たることを必要とするわけではない。自由、平等、寛容、正義に關するアジアの新しい民主主義的制度と觀念が成長しえないと一概に斷定することはできないであらう。アジアにおける新しき政府の形態は、單なる西歐の模寫たるべきでなく、西歐的要素と土著的要素との結合として、兩者から異なる新しい形態のものとして發展する可能性が全くないとはいえないのである。しかしながら、それにもかかわらず、その可能性を實現に導く諸條件の困難性については十分に認識してかからねばならない。

これを議會制民主主義について眺めてみよう。アジアにおける議會制政府の導入とその發達は、たとえ制限されたものであつたにしても、アメリカやイギリスの支配下にあつた植民地時代から既に始まつたとみてよい。フ

イリピン、インド、ビルマ、セイロンの如きはそれであり、インドネシアにおいても若干の進展がみられた。これらいずれの地域にあつても、程度の差こそあれ、西歐的議會制度を範型としたことは疑えない。このように育成された議會制政府の經驗が、主權獲得後におけるアジアの新興國家の民主主義的政府形態の發展に大なる寄與をなしたことは否定できない。住民の政治參與組織としての議會制度の移植のおくれた國ほど、獨立後の政治的安定とデモクラシーの發達が阻害せられてゐる事情こそ、この間の消息を物語っている。しかしながら獨立後の議會制政府の機能と運営は決して満足すべきものではないといえない。その原因の第一は、まず選舉に關するものであるが、それは獨立アジアの諸國においては、普通選舉が普通教育に先行したということである。⁽²⁾ 有権者の多數が文盲であるといふことは腐敗、脅迫、煽動、情實等の危険をふくみ、選舉本來の目的と機能が十分に達成せられないおそれがあるといふことである。第二に、それと關連して、アジアの議會制度は西歐のそれと異なり、卓越した少數の指導者によつて運営せられ、議會

政治が多分に專制化への危険をはらみつつあるといふことである。第三に、政黨の機能と役割についてであるが、アジアにおける殆んどすべての政黨は、その成立の事情からいつても、過去の民族運動の擔い手として發達したものである。獨立運動の先頭に立ったインド國民會議派 Indian National Congress も、回教連盟 Moslem League も、セイロンの統一國民黨 United National Party も、ビルマにおける反ファシズム人民自由連盟 Anti-Fascist Peoples' Freedom League (AFPFL) も、インドネシアの國民黨 Partai National Indonesia (PNI) も、フィリピンの國民黨 Partido Nacionalista も、いずれも本質的には民族主義に立脚する政黨であり、反植民地主義をその最大の旗印として戦つてきたのである。しかしながら、獨立達成後は、全く事情は異なり、はたして過去に演じた機能と役割をひきつづき現在の新情勢に適合せしめうるかいなか、多くの問題が存するところである。「獨立のための組織」が「自由のための組織」として新しく機能しうるためには、かなり思い切つた轉換と脱皮を遂げることなしには不可能であるといわねばな

らない。この點について、右にかかげたいずれの政黨も深刻な反省を要請せられている。一九五四年三月の選舉において、東パキスタンで經驗せられた回教連盟の惨敗の如きは、その顯著な例證を提示したということができよう。アジアの政黨は、少くとも近代的政黨として成長し得んがためには、政策綱領を中心とした政黨として再編され、眞に議會制民主主義の擔い手として自己を自覺し革新の道を進まなければならないであろう。

次にアジアにおけるデモクラシーの成長可能性と條件に關して二つの問題點を指摘しておかねばならない。第一の問題點は、アジアにおいては既に舊くから村落共同体の傳統的制度の中に、民主主義的經驗が存在しており、これを伸長せしめることによって、アジアに固有なる民主主義的制度をうちたてようと主張する人がある。たしかにアジア社會の歴史的傳統の中には、單に專制的な特質のみならず、村落共同体生活の中に生きている民主的要素が存在する。しかしながらこの「傳統的な村落民主主義」 traditional village democracy は Emerson Rupert Emerson も「⁽⁹⁾決して「一人一票」

アジア・ナショナルリズムの現段階的諸相

one man, one vote 主義の政治的表現に見出されるような「人間の平等と尊嚴」という觀念はふくんではおらず、力點は集團におかれて、個人にはおかれていないのみならず、ローカルないわば、face-to-face な關係から、未知の大衆という大なる國民的規模に、これを延長することは不可能であって、近代的な民主制度を古來のアジアの傳統の中からひき出すことは許されない。このような連續性は遮斷されており、むしろそれはアジアの傳統的なデモクラシーとは全く異なる新しい原理に立脚しているものと理解されねばならない。しかしながら、西歐から輸入された原理や制度と土著の傳統的な原理や制度とが、その接觸面において、どのような並存、混合、融合が起るかとはきわめて興味深い問題であり、性急輕率な判断を下すことは困難である。むしろわれわれは、ここで問題とせられているような民主主義的制度はあくまで外國からの輸入品であることを率直に認め、しかしただいかにすれば、外來要素を内在化し、土著要素を新時代の要素に適合せしめうるかというリアルな立場に立つて眺めるよりほかに道はないと思われる。

第二の問題點として指摘しなければならぬことは、アジアにおける近代的民主主義の實現をきわめて困難にし、或いは全く不可能にしてしまふかも知れない諸條件が數多く存在していることである、それは貧困や文盲の問題のほかに、(1)植民地制度の殘滓があること、(2)政治的にめざめた中産階級が缺如していることと、(3)制度の移植が漸進的でなく急激であること、(4)共產主義の壓力の増大等の諸要因があるばかりでなく、さらに、生活水準引上げのための大規模且つ急速な經濟開發を志向するあまり、開發への最も直接的且つ強力な路線として、民主主義的體制よりも全體主義的體制を選ぶ危険なしとしないのである。⁽⁴⁾たとえば、外國からの資本援助が十分に行われない場合、貧困と後進性という極度に困難な條件のもとで、國內の資本蓄積を強行しようとすれば、それは住民の大多數が深刻な不滿を抱いている現在の低い生活水準をさらに大幅に引下げる強制貯蓄の實行を意味する。これは高度に強權主義的な手段によらないで達成されることは決して明言できない。換言すれば、急速な經濟開發目標に辿りつくために、民主的政治の道があまり

にも限られた成果しか生まないとすれば、多くの人々は強權主義的或いはおそらく全體主義的ですからある何らかの政治組織を手段として、最大の目標を追う以外に方法はないと結論することになるであろう。

しかもこのような全體主義的政治體制へ走る危険は、アジア社會の傳統的、家父長的、專制的な土著の社會的經濟的生活様式の中に容易に見出される。したがって民主主義的政治理想の影響があるにもかかわらず、舊い傳統的な勢力は新なる裝いを凝らして容易に盛り返えし得て、新たな政治社會體制も全體主義的性格を帯びてくる可能性は十分にある。換言すれば、アジア的專制主義の現代的焼き直しという形で全體主義へ走る危険を豫感せしめるのである。それゆえ、アジアにおける經濟開發が少くとも上述の陥穽を回避し成功するためには、經濟開發は一般住民の文化的、社會的、政治的地位の向上が、近代的生産力の上昇と相伴って進む如き性質のものとして指向されねばならないのである。

(1) これに關する文獻としては、Bailey, Sydney D.; Parliamentary Government in Southern Asia: An

- Introductory Essay on Developments in Burma, Ceylon, India, and Pakistan, 1947—52. Hansard Society, London 1953. 100 pp.; Problems of Parliamentary Government in Colonies: A Report prepared by the Hansard Society on Some of the Problems Involved in Developing Parliamentary Institutions in Colonial Territories. London. Hansard Society, 1953. 154 pp.; Emerson, Rupert: Representative Government in Southeast Asia. Cambridge 1955. 197 pp.
- (2) Bailey, S. D.: op. cit., p. 58. (佐藤和男「ケイリー 著南アフリカの議會政治」〔紹介〕ナシム研究二卷二號、昭和三十年十月刊、一三六—一三九頁)
- (3) Emerson, R.: Problems of Representative Government in Southeast Asia. In: Pacific Affairs, Dec., 1953. pp. 291—292.
- (4) Kahin, George McF.: Indonesia's Strengths and Weaknesses. In: Far Eastern Survey. Sept. 26, 1951. pp. 157—162; Wolf, Charles: Political Effects of Economic Development. In: Far Eastern Survey, May 2, 1951. pp. 81—87; van der Kroef, Justus M.: Foreign Aid and Social Tradition in Indonesia. In: Far Eastern Survey, Oct. 24, 1951. pp. 181—185.

ナシム・ナシヨナリズムの現段階的諸相

六 經濟的ナシヨナリズムの問題 ——植民地經濟から國民經濟へ——

以上われわれは現段階におけるアジアのナシヨナリズムが當面している困難の諸相を、政治的、文化的側面から眺めた。そして獨立の第一段階を経過したアジアのナシヨナリズムがいかに第二段階としての統一と自由の問題に苦しんでいるかを明かならしめた。而してこの統一と自由を妨げているものは外部からというよりは、むしろ内部からの要因であり、人種的、宗教的、言語的、社會的諸要因がからみあって、レーシアリズム、コミンチナリズム、プロヴィンシアリズム、オートリタリアニズムの形をとって、分離的、分裂的ないし反民主的傾向を顯在的または潜在的に強めていることを明かにした。アジアのナシヨナリズムとデモクラシーが、この危機的様相を克服して、確固たる近代國民國家としての成長を遂げうるためには、單なるルネサンス、リフォーメーションの課題の充實だけで十分ではない。それにはさらに強力な經濟的革命をもって裏づけなければならぬので

ある。アジアのナシヨナリズムの自己完成にとって、必要なのは政治的獨立と統一と自由のみではない、經濟的獨立と統一と自由こそ一層重要であるといわなければならぬ。アジアのナシヨナリズムは、既に述べた如く、植民地ナシヨナリズムをその基本的性格とするものであった。植民地ナシヨナリズムは政治的支配からの解放をめざすと同時に經濟的貧困からの解放を必然的に要求する。

東南アジア諸國は西歐資本主義國の植民地として政治的に支配せられていたことが、その經濟の本質的性格を植民地經濟 colonial economy ならしめた。植民地經濟の特質は、一言にしていえば從屬經濟 dependent economy であるということであり、すべてが本國經濟の利益のために變形された。植民本國は十九世紀末葉から二十世紀初頭にかけて、その經濟目的に従って、東南アジア地域を單なる食糧原料輸出市場、工業製品輸入市場として本國經濟に對して從屬的地位においた。そこに作り出されたものは、いわゆるモノカルチユア(單一栽培) mono-culture 的偏倚生産であり、しかもかかる輸出特

産物は世界市場の景氣變動による深刻な影響をまぬかれなかつた。不況や恐慌の波及は住民經濟をきわめて不安定なものならしめた。

資本主義的植民地企業農園の發達は、もちろん住民の一部に恩恵を與えはしたが、その所得分布は不均等であり、自給的村落共同體經濟の解體、土著中小手工業の衰滅、宗教的慣習的社會制度の崩壊は、土著住民經濟及び社會の均衡と安定を根柢から揺り動かした。土地の喪失、負債の増加、失業の激化、米の消費の低下は現住民一般大衆を底知れない貧窮化へ追いやったのである。住民の全般的所得水準、生活水準の改善のための根本的解決の道は、漸進的工業化以外にないのであるが、植民本國は本國からの輸出生産物との競争を恐れて植民地に民族工業の育成を顧みなかつた。土地關係における封建制、勞働關係における低賃銀、資本關係における蓄積阻止、貿易及び國際收支關係における不等價交換と出超的排出は、農業における低い生産性と、食糧供給に對する人口壓迫と相俟って、アジアの經濟を宿命的停滯にとどまらしめた。このようにして、アジア經濟は植民地經濟としての

典型的な特徴を刻みつけられたのである。

それゆえ、アジア諸國の經濟的獨立の課題は、何よりもまず植民地經濟からの脱却になければならない。モノカルチユアの生産體系を改めて、均衡のとれた多様化された國民經濟 a balanced and diversified national economy を確立しなければならぬ。しかしながら、經濟的民族革命への道は政治的民族革命への道よりも一層困難であり、それは時間のかかる長い努力の過程を必要とする。モノカルチユア的生產體系を改めたいが、工業化のための資本財輸入に必要な外國爲替を獲得するためには、當分それを延期せねばならぬというディレンマに直面しなければならぬ。

工業化と經濟開發のために必要な資金を自力によつてまかなおうとしても、低い生産力と低い所得水準の中からの國內資本の形成はきわめて限られたものである。アジア諸國にとつて、經濟發展の可能性を自主的内部的につかみ出すということほど困難な課題はない。そこで已むを得ず外部資本の援助に依頼せざるをえない。外部資本の援助を乞うことは、多かれ少かれ、政治的經

アジア・ナショナリズムの現段階的諸相

濟的獨立性を犠牲に供することなくしては不可能である。ここにもまた避け難いディレンマが存在する。

ディレンマはこれのみではない。アジア諸國にとつて現在最も緊急の課題は、何よりもまず第一に生産力を發展せしめることである。而してその生産力の發展を可能ならしめるところの資本蓄積の推進である。そのためには、場合によっては、一般消費水準の低下や所得分配の不均等さえも已むをえざる害悪として承認せねばならない。しかしながら新興國家の政治的獨立と共に必然的に生活水準の向上を期待した一般民衆に對してこれを強行することは心理的にきわめて困難なことである。生活不安はそのまま政治的不安を激化し、弱體な新興政府の基礎を、たちまち脅やかすからである。それゆえに、新興國家の經濟政策は、多かれ少かれ社會主義的政策を考慮せざるをえず、少くとも社會正義 Social justice の實現をその項目にうたわざるをえないのである。生産力の發展と所得分配の均等化という二つの要請を漸進的ではなく、同時に解決せねばならぬところに新興國家の深い苦惱がかくされている。

植民地經濟的從屬關係からの脱却という意味での經濟的ナシヨナリズムの課題は、既に述べた如く、資本形成の問題一つをとりあげてみてもいかに困難であるかを知ったのである。いわんや國際經濟關係において先進國と對等の地位で競争することができないという意味での「不平等化要因」disqualifying factors の存在は、アジアの經濟的獨立を一層困難ならしめている。この不利な状態を克服し、不平等化要因を除去する對抗力を、當該民族經濟發展の目的に適合するようにいかにして國內的及び國際的に促進し且つ組織するかが、將來に課せられたアジアの經濟的ナシヨナリズムの基本的課題である。アジア諸國政府が現在、何らかの形で着手しまたは推進せんとしている土地改革、工業化政策、國有化政策、協同組合、保護貿易政策等は總じて經濟的ナシヨナリズムの組織化の努力の方向を示すものとみるべきである。

う。而してこのような組織化が成功するためには、これらの諸國政府の基礎が、國內的、國際的に確固たるものでなければならぬことはいうまでもない。

ともあれ、獨立の第一段階を経過したアジアの政治的ナシヨナリズムは、國內における政治的統一と民主的自由の課題に對決し、その經濟的ナシヨナリズムは、國際經濟關係における從屬化からの解放とバランスのとれた國民經濟建設の課題に當面している。しかもこの二つの課題をめぐってアジアのナシヨナリズムの現段階の様相が、いかに複雑且つ苦惱にみちたものであるかの一斑^(註)を、われわれは以上によってほぼ明かにし得たとしなればならない。

(註) なおほかに、ナシヨナリズムと共產主義とのからみあいの問題や、アジアの中立政策や第三地域論の問題にもふれたかったが割愛せねばならなかった。